

長編ドキュメンタリー映画 『百姓の百の声』



2022年11月5日～東京・ポレポレ東中野にてロードショー公開
11月18日～京都シネマ、11月19日～第七藝術劇場、ほか全国にて順次公開

公開館情報はこちら【公式HP】 → <http://www.100sho.info>

画像セットはこちらよりダウンロードください

https://www.dropbox.com/s/ph175mswbr9qtbs/100sho_press_photo.zip?dl=0

予告編 URL → <https://youtu.be/h0q7xqxxdRw>

監督 柴田昌平

製作著作 プロダクション・エイシア

制作協力 農文協（一般社団法人 農山漁村文化協会）

映画の概要

食べている限り、誰の隣にも「農」はある。
なのにどうして、これほど「農」の世界は私たちから遠いのか。
これは自然と向き合い、作物を熟知する百姓たちの
叡智を訪ねたドキュメンタリー。
食卓の向こう側にいる「耕す人々」の世界の入り口が、ここにある。

和食を撮って世界を魅了した『千年の一滴 だし しょうゆ』の柴田昌平監督が、「食」の原点である「農」と向き合った。93歳から21歳まで、全国の百姓たちの知恵・工夫・人生を、美しい映像と丁寧なインタビューで紡ぎ出す。田んぼで農家の人たちが何と格闘しているのか、ビニールハウスの中で何を考えているのか。多くの人が漠然と「風景」としか見ていない営みの、そのコアな姿が、鮮やかに浮かび上がる。

みんなつまづく。そして前を向く。転んでは立ち上がる復元力

今後 経済が下向き、食糧輸入に頼れなくなると予想される日本で、いま必要とされる力は、レジリエンシー：復元力。百姓たちには本来これが備わっている。
映画に登場する百姓たちは、小手先では解決しないさまざまな矛盾を、独自の工夫で克服していく。

映画の制作・著作、および配給

「百姓の百の声」

製作・著作：プロダクション・エイシア

制作協力：農文協（一般社団法人 農山漁村文化協会）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業） | 独立行政法人日本芸術文化振興会
2022年／日本／カラー／130分／DCP／4K撮影

配給：プロダクション・エイシア

お問合せ：配給 プロダクション・エイシア

〒202-0015 東京都 西東京市 保谷町2-7-13

Tel. : 042-497-6975 Fax : 042-497-6976

携帯：090-6143-0887

メール：info@asia-documentary.com

公式サイト：www.100sho.info

担当：大兼久由美（おおがねく・よしみ）

製作経緯と映画に込めた思い

僕は大学時代に 1 年休学し 山村で農家の手伝いをしながら、古老たちの人生の聞き書きをして過ごしました。そんな僕にとって、農への理解を「点」から「面」として深めていくことは 30 年來の夢でした。ドキュメンタリー映画『百姓の百の声』は、4 年をかけ全国の農家を訪ねました。

直接のきっかけは、日本酒の杜氏から稻の品種の多彩な個性、そして栽培する農家の知恵について教えられたことでした。もっと視野を広げたいと思い、学生時代からの友人が農文協にいたので相談し、月刊誌「現代農業」のチームと共に全国の農家と一緒に訪ねさせてもらいました。

映画のタイトルに”百姓”という言葉を使っていますが、実は、”百姓”は放送禁止用語になっています。

その背景には、農業に対して近代の日本人が抱いてきた、ぬぐいがたい差別意識のようなものが横たわっていると感じています。辛そう、泥まみれ、儲からない、肉体労働…みたいな、農業や漁業の方々へのどこか蔑んだ視点。

「農家は厳しい、辛い、かわいそうな人たち」——多くの日本人にはこの感覚がどこか深層心理のようにあるのではないかでしょうか。それは、明治以降の近代化や、戦後の高度成長の中で、都市的・工業的なものこそが価値あるものと見えるよう、教育もメディアも少しずつ醸成しつづけてきた意識なのだと思います。

第1次産業よりも、どう加工するか、どう売るか、経済をどう廻していくかのほうが未来的でスマートでカッコいい、生産者はカッコ悪いとまでは言わないけど大変そうだし、みたいな感覚です。

農業をめぐっては、今も多くの「問題」がマスコミなどでは語られます。

そして解決策としては、「6 次産業化」、つまりどう売るかとか、スマート農業など機械メーカーの動きに焦点が当てられ、根本的な百姓の営みを掘り下げるメディアは多くはないように思います。

一方、「問題」として扱わない場合は、正反対に「理想の天地がここにある」、みたいなユートピアとして扱う——、2 極化された言論空間。

そこには、当事者である百姓たちの声はありません。

こうした社会の持つ深層意識は、子どもたちに敏感に伝わります。茨城県内の中学生に「将来なりたい職業はなにか」とアンケートしたところ、「農業」と書いた生徒はひとりもいなかつたそうです。

しかし、実際に踏み込んでいくと、農業は「問題」以上に、「可能性」に満ちた世界なんだと気づきました。

百姓って本当は、

- ・人間と自然の関係を見つめている賢人・哲学者であり
- ・高く売れるものを作る、喜ばれるものを作るというクリエイターであり
- ・天気や風や水の動きを捉えたり生物学の基礎知識を使うなど科学にも精通した者たちであり
- ・機械や道具を使いこなし、直して改良していくエンジニア・職人であり

ものすごいことをしているし、カッコいいんです。

共に過ごす時間が長くなればなるほど、ますます惹かれていきます。

ただ、残念なことに、行政も消費者もそれをよく理解していないのではないか？日本の未来をよくするものとして農業を生かしきっていないのではないか、と強く感じました。

取材をさせてもらったコメ農家、横田修一さんは言います。

「農家っていうと”可哀そうな人” “弱い人” という目線でメディアに載ったり政策議論されることがほとんどだけど、実際はそうじゃない。僕は“百姓”という言葉が大好きだし、誇りを持っている」

さまざまな課題があるにしろ（それはどんな分野の職業でもそうです）、僕たちはまず、自分たちが食べているものを作る農家＝百姓のことをきちんと知ることから始めることが大事なのではないかと思いました。

監督 柴田昌平



農の世界へガイドしてくれた農文協からの推薦の言葉

このドキュメンタリーでは、取材の手掛かりとして農文協（農山漁村文化協会）に各地の農家を紹介してもらいました。

農文協（農山漁村文化協会）とは、農業関係を得意とする出版社で、一般社団法人。名前は似ていますが、農協とはまったく別の組織です。「農家に学び、地域とともに」をテーマに設立され、その基幹となっている月刊誌「現代農業」は100年の歴史を持ちます。農家で、農文協や「現代農業」を知らない人はいないでしょう。

政治的にも経済的にも独立した組織である農文協は、全国にネットワークを持ち、農家の技術や知恵を記録してきました。編集チームを率い、この映画の監修もしてくださった百合田敬依子さん（編集局長）からの推薦の言葉です。



農家って、普通の人たちだ。それでいて、最強・最高の人たちだ。そのことが、この映画でシンプルに伝わればいい。

長年「現代農業」の編集に携わってきた私には、農家の世界（百姓国）が最高に愉快で深くて素敵なことは、あまりにも自明なことでした。その魅力の虜になってしまったからこそ、長年この仕事を続けてこられたんだと思います。でもそのせっかくの魅力を、農家以外の世界の人たちに伝える努力を私はこれまでしてこなかった。伝え方がわからなかつたんだと思います。だけど柴田昌平監督は、そこに挑戦する！というのです。

最初、監督が「農家を撮りたい」と相談に来たときは、「そんなもん、作品になるんかいな？」と思いました。農家どうしが見ておもしろい映像ならいくらでも撮れるだろうけど、農家以外の人が見て、それが伝わるのか？ だけど監督は「だからこそ、そこに挑戦したい。農家のことを消費者がわからなくなっている今、それこそがやるべきことだ」と力強く言うのです。これにはホダされました。

そこから足かけ3年。コロナ禍で撮影にも苦労しましたが、農家にも、食べる側の人にもじっくり見て、感じてもらいたいスゴイ映画ができました。たくさんの「百姓の声」が聞こえてきます。「農家（百姓）って普通の人たちだな、それでいて最強・最高の人たちだな」と、伝わるんじゃないかなと思います。

この映画で百姓国のトビラが開いて、1人でも多くの人にその空気を吸ってもらえば、世の中結構変わるんじゃないかな。よく、「顔の見える野菜」とかっていいますが、これまでのっぺらぼうだった「農家」の顔が具体的に浮かび、声が聞こえるようになれば、わざわざそんな言い方する必要もなくなるんじゃないかな、とも思います。「この国には農家がいる、作物と自然とつきあう能力に長けた百姓がいる」と心の底で思えれば、大きな安心と自信に包まれて生きていけるような気がします。



農文協・編集局長
百合田敬依子

ドキュメンタリー映画監督からの推薦の言葉

お百姓さんは、なぜこれほどまでに強くて賢いのだろう。

目の前の自然をくまなく観察し、自分の頭で思考し、先人たちの智恵と、農家同士で得た情報を絶えず学びながら、自らの肉体を使って労作する。太陽の光でピカピカに輝く彼らの表情を見ながら、農的営みは、人間を最も人間たらしめるものだと思った。

彼らは、ひと粒の種が、何千倍、何万倍に増えるいのちの仕組とその不思議を知っている。いのちは繊細であってもやわではない。ほんのわずかでも可能性があれば、生きる方向へと向かう。日々、そのいのちを相手にしているお百姓さんたちもまさに同じだ。現代社会が作り出した経済やルール、汚染や破壊があっても、その隙間から根を伸ばし、利用できるものを利用し、新たな発想を生み、変化し続ける。強さと賢さはさらに増していく。

種は、長い歳月をかけて更新されてきた農民の努力の結集であり、独占するのではなく、共有していくことが、行く行く危機回避につながるという。同様に、お百姓さんひとりひとりの肉体に、何世代にもわたり試行錯誤を繰り返しながら引き継がれてきた農民の記憶や技術、哲学が宿っている。

柴田監督の開かれた知と情熱は、個々のお百姓さんに蓄えられてきた膨大な叡智にアクセスすることを試みた。「批判」「対立構造」「問題解決」などという安易な提示に慣れきっている私たちに、この世界は、もっともっと複雑で奥深く、それを理解し創意工夫するお百姓さんの喜びや面白さを伝える。日本の農業の厳しい現状を想像しつつも、ひとりひとりの姿を見ていたら力が湧いてきた。百姓国の大扉は、これから私たちの厳しくとも陽の射す明るい道へ続いていることを確信した。

頬嶺あや（映画監督『ある精肉店のはなし』『祝の島』）

クレジット

【語り】 遠藤春奈（百姓 こんにやく栽培）
田中綾華（百姓 食用バラ栽培）
横田 祥（百姓 稲作）
柴田昌平（監督）

【出演】 ※主な出演者のみを出演順に列記します。

薄井勝利さん（福島県・84歳・米、リンゴ）
若梅健司さん（千葉県・93歳・トマト）
横田修一さん（茨城県・46歳・米）と横田農場の皆さん
村田洋さん（山口県・62歳）と秋川牧園の皆さん
海地博志さん（山口県・77歳・飼料米、米）
山口仁司さん（佐賀県・70歳・キュウリ）と研修生の皆さん
斎藤忠弘さん（秋田県・78歳・米）
高橋修さん（山形県・66歳・苗専門の農家）
上野長一さん（栃木県・70歳・在来種の米、麦）
魚住道郎さん（茨城県・71歳）美智子さん（70歳）夫妻（有機野菜栽培）
深谷聰さん（茨城県・39歳・ブドウ）
細川勇喜さん（福島県南相馬市生まれ・74歳、震災で山梨へ移住、山菜名人）
清友健二さん（岡山県・53歳・野菜）
農文協「現代農業」編集部、東北支部の皆さん
※年齢は2022年3月現在

【制作協力】 農文協（一般社団法人 農山漁村文化協会）

【監修】 百合田敬依子

【主なスタッフ】

監督	柴田 昌平（略歴は末尾）
プロデューサー	大兼久 由美
制作デスク	宮川 尚子
撮影	柴田 昌平 大兼久 由美
音楽	Dan Parry 甘茶
編集	高橋 慶太
音声	柳田 敬太
カラーグレーディング	堀井 威久磨
題字	財前 謙
メインビジュアル	阿部 結
宣伝	松井 寛子

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

【監督 柴田昌平 略歴】

1963年生まれ。NHK（沖縄放送局、東京・報道局特報部）、民族文化映像研究所（姫田忠義所長）を経て、現在は映像制作会社プロダクション・エイシア代表。

○映画作品（制作年）

- ・『ひめゆり』（2006年）
キネマ旬報ベストテン1位（文化映画部門）
文化庁映画賞・文化記録映画大賞、JCJ賞特別賞（日本ジャーナリスト会議）他
- ・『森聞き』（2010年）
児童文化福祉賞、キネマ旬報ベストテン7位（文化映画部門）
日本映画ペンクラブ3位（文化映画部門）、フィンランド・オウル青少年映画祭正式招待
- ・『千年の一滴 だし しょうゆ』（2014年）
キネマ旬報ベストテン2位（文化映画部門）
ATP賞総務大臣賞（全日本テレビ番組製作社連盟）
辻静雄食文化賞
アメリカ・考古学チャンネル国際フィルム・ビデオ映像祭奨励賞
- ・『陶王子 2万年の旅』（2021年）
キネマ旬報ベストテン3位（文化映画部門）
ATP賞優秀賞（ドキュメンタリーディレクター部門）（全日本テレビ番組製作社連盟）

○テレビ作品（受賞作品一部）

- ・NHKスペシャル・新シリクロード 第1集 『楼蘭・四千年の眠り』（2005年）
アメリカ・国際エミー賞出品
- ・NHKスペシャル・新シリクロード 第5集『天山南路・ラピスラズリの輝き』（2005年）
ニューヨーク・フェスティバル金賞受賞、イタリア国際宗教映画祭出品
- ・NHKスペシャル・世界里山紀行『フィンランド・森・妖精との対話』（2007年）
ドイツ・ワールド・メディア・フェスティバル銀賞 他
- ・NHKハイビジョン特集『北海道・豆と開拓者たちの物語』（2011年）
ATP賞ドキュメンタリーディレクター部門最優秀賞
- ・NHKスペシャル『クニ子おばばと不思議の森』（2012年）
放送文化基金賞ドキュメンタリーディレクター部門優秀賞
アメリカ国際フィルム・ビデオ祭 Gold Camera（環境・エコロジー部門1位）
中国・四川テレビ祭 最優秀人類学賞ほか